

08-11

高機能急性期病院としての連携室の在り方 —紹介・逆紹介の増加に向けて—

京都第二赤十字病院 地域医療連携課

○佐治 拓哉、山本 剛

【はじめに】当院では、平成26年度診療報酬改正においてDPC2群病院へ分類された。本改正において医療機関ごとの機能分化は更に加速することから、高機能急性期病院を目指すならば紹介患者数の増加及び逆紹介の推進に対する対策は必要不可欠であった。

【現状】当院の外来は診療料単価が他の同規模赤十字病院と比べて著しく低い状況である。その要因としては再来患者数とりわけ診察及び処方のみと考えられる患者数が多く、かかりつけ医的な要素が強い外来であるといえる。その結果、各診療科の診察枠が再来患者によって埋まるケースも多く、地域の医療機関からの紹介予約が入りにくい状況となっている診療科も点在するなど、紹介患者の流出にも繋がっていると考えられた。

【対策と効果】まずは、医事課の協力を得て診療科毎に逆紹介対象患者に関する分析結果を各診療科へ報告し、その後各診療科より要望の強かった逆紹介に関する「かかりつけ医サポートセンター」を開設するなど逆紹介の推進に取組んだ。次に、紹介患者数の増加対策として、医師・予約センター・地域医療連携課とが共有して使用していた予約枠について、各診療科の実績に応じた紹介患者専用予約枠の新設を行うなど、医療機関からの紹介予約がスムーズに入る体制構築に取組んだ。これらの取組みにより紹介患者数及び逆紹介患者数ともに増加傾向が見受けられた。

【考察】今回は医事データを用いるなど、各診療科の状況を数値で表したことで診療科の理解を得ることができた。今後も様々なデータを用いた提案を実施し、更なる地域連携強化に取り組んでいきたい。

08-13

当院 ME センターの機器清拭クロス評価

横浜市立みなと赤十字病院 臨床工学部 臨床工学課

○岡田 直樹、津屋 喬史、小川 美悠、初鹿野 夏気、森下 和樹、宮島 敏、谷川 太一、小林 隆寛、鍋木 聡、大谷 英彦、皆川 宗輝

【目的】返却された医療機器の清拭前後でATP値を測定し、当院MEセンターで使用している清拭クロスの清拭評価を行った。

【方法】病棟から返却されたテルモ社製シリンジポンプTE-331S(以降シリンジポンプ)を無作為に14台選出し、清拭前後で3Mクリントレース ATP モニタリングシステムを使用してATP値を測定した。測定はシリンジポンプの表示部、外装側面、シリンジセット部周囲、設定ダイヤルの合計約400平方センチメートル範囲で行った。清拭は3M環境清掃用ウェットクロス(以降ウェットクロス)、白十字ソフキュアガーゼ(以降ガーゼ)にホシザキ電解水生成装置ROX-10WBで生成した強酸性水を含ませたもの(以降強酸ガーゼ)、ガーゼに50倍希釈ミルトンを含ませたもの(ミルトンガーゼ)計3パターンで行った。ウェットクロス5台、強酸ガーゼ5台、ミルトンガーゼ4台行った。

【結果】各清拭クロスの清拭前後のATP値は、ウェットクロスで908→55RLU、強酸ガーゼで1873→51RLU、ミルトンガーゼで1398→31RLUといずれも清拭前後で有意に低下した(P=0.02、P=0.02、P=0.04)。

ウェットクロス群と強酸ガーゼ群、ウェットクロス群とミルトンガーゼ群、強酸ガーゼ群とミルトンガーゼ群の比較でいずれもATP除去率に有意差はなかった(P=0.58、P=0.48、P=0.35)。

記載したATP値は中央値であり、P値の有意水準を0.05とした。

【考察】各清拭クロスの一枚当たりの定価が、ウェットクロス約20円、強酸ガーゼ約4円、ミルトンガーゼ約4円であることと、汚染除去性能に差が得られなかったことから、消毒効果の広い薬液を含ませたガーゼでの清拭が感染対策及びコストの面で有効と考えられる。

【結語】汚染除去能力は清掃専用製品であるウェットクロスもガーゼも大きな差がないことが示唆された。

08-12

医療連携の安定化をはかる

—連携医療機関からの要望対応データ蓄積について

名古屋第二赤十字病院 地域医療連携センター

○小里 恭子、鈴木 信行、塚本 章乃、小島 諭貴子、宮岡 千代子、春日井 えり子、近藤 剛史、早川 あゆみ、坂本 理恵、古城 敦子、黒木 信之、塚川 敏行、佐藤 公治

【背景】医療の機能分化と連携の時代を迎えているが、医療機関はそれぞれに独自性があり、連携元の求めるものが、連携先の他の医療機関で満たされるとは限らない。一つの医療機関で診療を完結する機会が減少し、従来に比して、患者はより多くの医療機関に移る機会が増え、医療機関の間での齟齬が生ずる機会も増えているものと考えられる。

【現状】当院は市中基幹病院として、地域医療連携を早い段階から重視し、現在は地域医療支援病院として1,600名を超える登録医と連携を行っている。従来から連携する医療機関から様々な意見・要望を受けてはいたが、問題事案その都度ごとの対応であったために事案の把握と対策が十分とはいえない状態が続いていた。

【目的】問題事案の蓄積のない状況を踏まえ、まずは事務的に連携医療機関からの意見・要望を取りまとめ、データベース化により傾向を分析、把握し、情報共有にて改善策を講ずることで、連携医療機関のニーズを満たす布石とし、より緊密な連携関係を図ることを目的とした。

【結果】問題と考えられる連携医療機関の意見・要望を収集、蓄積し対策を図っている。事案報告から案を得た一つの具体例として、退院後1週間以内に再入院となった症例を検討する、多職種協働ワーキンググループを地域医療連携センター内に編成し、問題抽出をはかることとなった。また将来的には、事案発生を減らすべく、該当事項に対する対応策集の作成へとつなげていきたい。

【まとめ】今後も当院にて発生した問題事案につき検討し、発生減少を目指し、円滑で継ぎ目のない、安全で安心な医療連携を進められるよう努めていく。

08-14

除細動器の運用改善

横浜市立みなと赤十字病院 臨床工学部

○小林 隆寛、津屋 喬史、小川 美悠、森下 和樹、初鹿野 夏樹、宮島 敏、谷川 太一、岡田 直樹、鍋木 聡、大谷 英彦、皆川 宗輝

【背景・目的】当院では、除細動器は3メーカー、5機種17台で運用しており、単相性除細動器、二相性除細動器の混在や機能など機種によってばらつきがあった。使用上の安全の為、2013年6月に院内急変対応システム確立に伴い、病棟配置の除細動器の機種統一を行った。同時に、該当部署へ使用方法、日常点検について勉強会を行った。

【結果】AED7台、除細動器17台(単相性3台、二相性14台)で運用していたが、AEDから二相性除細動器に変更4台、単相性除細動器から二相性除細動器への更新4台、新規1台増設を行い、AED3台、二相性除細動器22台となった。院内急変対応システム確立後に行った勉強会実施17回、延べ231名、勉強会前日常点検実施率33.3%であったが、勉強会後日常点検実施率95.4%となった。

【考察】病棟の除細動器を機種統一したことで、院内で発生した除細動を必要とする緊急時に担当医師が使い慣れているものを使用できようになったことでより安全な手技が行えると考えられる。除細動器の使用頻度が少なく設置場所や使用について知識と技術の習得が不十分な場合、患者の救命あるいは予後に影響を及ぼす。日常点検を実施することは、普段から除細動器に慣れることで除細動器への意識的抵抗が薄れ、迅速な除細動器の準備が行えると考える。また、消耗品の補充や機器の不具合の早期発見につながる。救命において除細動は必要な手技であり、除細動器の機種統一、該当部署への勉強会、日常点検は院内急変対応システムの円滑な運用において有用であると考える。

【結語】病棟配置除細動器の機種統一を行った。勉強会を実施し、日常点検の実施率が向上した。